

田代よいとこ - その11 - 名産・海底(おこ)和紙

昨年(2019年)の11月26日、日本の伝統工芸「和紙」がユネスコの無形遺産に登録されました。前年の「和食」に次ぐ登録は、我が国の伝統文化が世界に認められたということです。大変素晴らしいことだと思います。ところで、わが海底や戸倉、角田地区でも江戸時代から和紙づくりが盛んに行われていたことをご存知でしょうか。海底地区で代々和紙づくりに携わってこられた成井啓七さんにお話を伺ってきましたので、ご紹介しましょう(一部『愛川町郷土誌』も参考にしました)。なお、さらに詳しく知りたい方は、愛川町郷土資料館にお問い合わせみてください。

- 海底地区では、江戸時代から農閑期に副収入として和紙をつくっていた。荻野にあった山中藩に上納したという話もあるが、文書は残っていない。和紙は川にさらして灰汁(あく)を抜いたりしないといけぬ。川に近いことが海底地区に有利だった。海底和紙の最盛期は大正初期から昭和10年頃という。その後も昭和15年頃までは、主として障子紙等を製造していた。中津や荻野、厚木、相模原などへ売り歩いたというが、収入の中心は養蚕だった。
- 終戦後、建築ブームがおこり、紙の障子からガラスに変わる。畑で使う温床も以前は和紙に油をひいた油紙を使っていたのが、ビニールに変わった。同じく油紙を使った唐傘は、ビニールをはじめ他の素材に変わった。需要がなくなって採算が取れなくなり、45年くらい前に廃業した。しかし、愛川公園の工芸村から海底和紙を来場者に紹介したいという申し出があり、担当した。
- 原料の楮(こうぞ 地元では「かぞ」という)※1は、荻野の人に頼んで、荻野川の川岸に植えてもらった。今でも川岸で見られる。
- 和紙のよさ
和紙は、洋紙と違って、折り目を付けてもそこから紙が切れることがない(とてもしょうぶ)。洋紙は木の中の部分(パルプ)を使うが、和紙は皮の部分を使うからだろう。また、洋紙は漂白に塩素を使うが、伝統的和紙では灰を使うので”こし”があり、300~400年は保つ。
- 和紙ができるまで
 - ・11月半ば：楮を刈り取る
 - ・年末：楮を蒸して皮をむく→干す
 - ・1月：川に浸して上皮を取る。
 - ・3月いっぱい紙すきをやる。製紙用ののりとしてトロロアオイ※2の根を使う。



紙を平らにならす刷毛(はけ)



紙を乾燥させる台



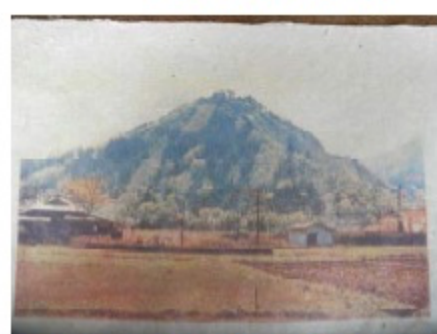
できあがったはがき



糞桁(すげた)
(溶けた和紙の原料をすくい取る)



干し板(和紙を貼り付けて干す)



昭和42年の館山(やかたやま)の写真
を和紙にコピーしたもの

※1 楮：山野に生えるが栽培もされる。生命力が強い。茎は2~5mになり、皮は褐色、葉は桑に似る。春花が咲く。果実は6月頃赤く熟し、イチゴのように甘い。

※2 トロロアオイ：あおい科、中国原産の一年草。高さ1~1.5mほど。根に粘液を多く含み、製紙用ののりに使われる。粘液がトロロのように粘ることからこの名がついた。オクラに似ている。地元では、「ねり」と呼んでいる。自家栽培した。